

平成 26 年度 産業動物部会セミナーの開催

「畜産経営環境の極めて厳しい中、産業支援のプロたる我ら産業動物獣医師は、産業に係るあらゆる分野の情報にも精通する必要がある。」「酪農家含め皆で学び合う、産業共同体の意志が不可欠。」

部会長の強い意志の基、H27年2月26日、万代市民会館に於いて、産業動物部会研修会が行われました。「日本の酪農乳業の現状及びこれからの展望について」と題し、㈱明治 東日本酪農事務所東海酪農課 課長 宮崎淑夫先生をお迎えし、酪農家を含めた約28名の参加者でした。

「世界の酪農生産は自給自足が原則。不安定で絶対量の少ない酪農製品貿易は、極端な価格変動を繰り返し、大手のみの寡占化と、世界的供給不足のリスクを高めている。」

「世界では、優れたアミノ酸バランスの蛋白である酪農製品の需要は上昇し続け、各国はこの蛋白資源を守ることを、かなり重視している。」

「あのヒット牛乳である“おいしい牛乳”は、酪農場のバルク室管理を重視した独自の HACCP 基準と、異常臭気乳の排除に着目して作られていた。」

「最大手乳業である㈱明治は、寡占化する小売業界との戦いの中で、強気の販売シェアを伸ばしつつ、今後の小規模 JA 乳業（3割赤字）の統廃合を予測している。」

「本州（特に新潟）の酪農場は、比較的小規模多数を維持しているが、自給飼料が多い北海道と比べ、輸入飼料費は1.7倍で、スケール格差が生じやすい。」

「全国の酪農メガファームは団体協議会を作り、僅かな組合手数料 0.92 円/kg や、集乳経費等を浮かせるため、直接取引（30t/790t=4%）の比率を高めつつある。」

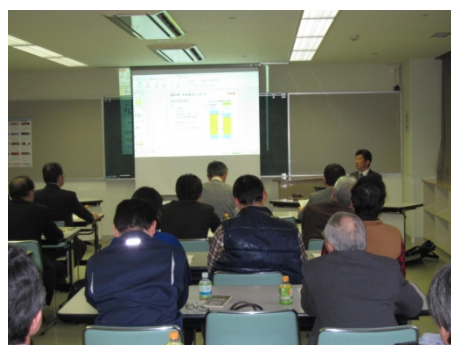
5月の TPP 発表が予測され、益々厳さを増す経営環境下では、業界内の格差が開くことが容易に予想されます。しかし流通の利益配分構造で小売りに支配され、衛生技術（HACCP）でも遅れを取る場合、我々の産業そのものの存続の為に使える武器は、極めて乏しいものとなると感じます。

「国民の貴重な蛋白資源としての公共価値をもっと前面に出し、業界組合として一面的な経営競争に負けない、多くの地元市民の支持を得る情報力が、ぜひほしい。」「世界の多くの国の指針に学ぶべき。」「では、支援業たる獣医師は何を学び、今何を成すべきか・・・。」「三条市牛乳問題が提起した事とは？（デーリーマン3月号をぜひ参照）」

まるで“花燃ゆ”の如く、酪農家を交えた懇親会での、ツバ飛ぶ論議は続きました。



講演される宮崎淑夫先生



受講風景